

「臨牀透析」創刊 40 年目を意識して

佐藤 久光*

「臨牀透析」は 1985 年 1 月に創刊された。今年 (2024 年) はそれから 40 年目に当たる。本雑誌は「トータル医療として透析を考える」ことを目的として創刊され、患者とその家族、医師、看護師、臨床工学技士、管理栄養士、薬剤師、医療相談員など、多職種が関わる医療現場の状況に鑑み「地域ぐるみのトータル」の視点から編集されてきた。そのため、創刊号のテーマは、「透析患者と水・電解質」という最も患者の生活に身近なテーマであり、次号と次々号では「現代透析看護の問題点」が連続して取り上げられた。そして、透析機器を管理する技師も国家資格として認められる以前から現場で活躍していた。まさに「臨牀透析」は、医師を中心としたコ・メディカルスタッフが一体となった総合的な業務内容を「臨床」の立場から明確に取り上げた雑誌である。

発刊から 40 年目を迎えた今日、透析の現場は大きく変わろうとしている。患者の高齢化とそれによる腎不全患者の増加である。40 年前は 5~6 万人程度だった透析患者数であったが、今日ではその 6 倍近くまで増加している。そして、一人暮らしで認知症をもっている高齢患者の増加である。もはや、患者と医療機関との関係だけでは通院維持透析は成り立たず、地域を含めた「トータル医療」が必須となってきた。それは「臨牀透析」が創刊当時から描いていた状況がより現実的になってきたということでもある。

40 年目を迎えた今日、「臨牀透析」はこうした変化にお

* 増子記念病院医療安全管理室

ける新しい視点からの執筆内容が求められている。通院透析から在宅透析への変更，単純な血液透析から中分子物質も濾過できる血液濾過透析（HDF）への移行，腹膜透析や腎移植などの腎不全医療の多様化への動き，透析日や透析時間の変更，あるいは透析を受けずに死を選択するなど，その選択肢はますます多様化しており，医療従事者の対応も非常に多彩になってきた。

こうした時代を受けて，「臨牀透析」はますます「トータル医療」として多職種の関わりが大きくなってきている。この新しい時代を牽引する雑誌として改めて次の50周年に向けての取り組みが求められている。

引き続き，本雑誌が多職種の医療従事者だけでなく，透析治療を受けている患者にも読める雑誌にしていきたい。透析患者は長期に関わることで知識人も多くいるため，雑誌「臨牀透析」の読者としても大きな存在である。そのことも念頭において，今回の「臨牀透析」40年目のオピニオンとしたい。